稲米(穀)としてのブラジルにおける

工業教育事情調査指導報告書

1968年8月

国際協力事業団

700
245
ESE

国際協力事業団	
受入月 '84. 4. 21	700
	24.5
登録No. 03764	ESE

はしがき

邦人移住者子弟の教育対策の一環として，南米西語地域においては，現在日本から日本語指導教師を長期派遣し，現地日本語学校の教師の指導にあたっている。

本報告書は，昭和 56 年度にブラジルに派遣した熊本洋日本語指導教師の調査結果をとりまとめたものである。海外日系社会における児童の今後の日本語教育問題について内外関係者各位のお役に立てば幸いである。

昭和57年8月

移住事業部長

昭和57年（1982）1月25日から同年2月23日までの30日間パラグアイ，アルゼンティン，ブラジル，メキシコの4か国における日語教育事業を視察調査した。ブラジルにおいてはポルト・アレグレなど6か所において現地日語教師の意識改革の面から日本語の国際化について講演し，現地日語教師の指導にもあたったが，ここにその報告書を提出するとともに南米における日本人移住者子弟第2世，3世，4世の日語教育の具体的施策をも提案する。

目　　次

日程と主要事項 …… 1

日本語教育研究に好意的なパラグアイ
移住者たちは日本的日本語教育に愛着の傾向 …… 5

恵まれた環境にあるANULPの日系学生たち …… 7

日語学校を日本の義務教育のようにと切願する
ポルトアレグレの教師の声 …… 9

日語教育の一大拠点サンパウロ …… 12

完全都会型のリオ・デ・ジャネイロ …… 17

クビチェック移住地での合同研修 …… 18

アマゾン地域の日語教育 …… 20

日語教育に理想的姿を実現したメキシコ …… 23

くやまれるJAMIC・JEMISの撤退 …… 26

日語教育に電波を活用しよう …… 28

む す び …… 31

日程と主要事項

1月25日　17時30分　VARIG機で東京発　リオ・デ・ジャネイロ経由パラグアイへ

1月26日　13時すぎ　パラグアイ・アスンシオン着

JICAアスンシオン支部で，ボリビアのサンタクルスのサレジオ会から派遣されたシスターTeresa molgonaと会談，サンタクルスにおける同会の活動状況をきく。（同シスターがサンタクルスからわざわざ熊本に会いに来たのはサンタクルスにいるサレジオ会の倉橋輝信神父によるもので，同神父は熊本がマドリード国立語学校に日本語講師として赴任していたころ，同語学校にスペイン語の勉強にきたことがある。）詳細29ページ

週刊日系ジャーナルの高倉道男，今操両氏，サンデーパラグアイの古賀公記者と会談，ラジオZP11の日本語放送の実情をきく。（詳細29～30ページ）

1月27日　午前　パラグアイ外務省にマドリードで旧知のRodnoy Elpidio Acevedo 次官表敬，文部省にFabio Rivas次官表敬　日本大使館に大鷹正大使表敬

正午　バスでエンカルナンオンへ

午後6時すぎ　エンカルナンオン到着

杉田敏治領事表敬

1月28日　フラムでの「全パ日語教師研修会」視察

全パ日語教育研究協議会会長　大郷国太郎氏と意見交換

1月29日　Radio parana 訪問　ニッポン放送のテープ

「日本童謡史」「尋常小学唱歌」の放送を交渉快諾を得る

JICA 篠崎俊英エンカルナンオン支所長，野館午郎指導教師，全パ日語教育研究協議会　小田俊春　事務局長と意見交換

1月30日　午前　エンカルナンオンを出発　パラナ川を渡りポサーダスへ向う。ポサーダスから空路ブエノスアイレスへ

16時　ブエノスアイレス着

JICA　ブエノスアイレス支部会田孝一氏，神戸新聞黒田公男編集委員と情報交換

1月31日　ＪＩＣＡ 末次輝雄 ブエノスアイレス支部長の案内でラプラタ移住地および
Asociacion Nipona universitaria La plata学生寮視察

2月 1日　日本大使館に大島弘輔公使表敬
ブエノスアイレス西南方約40kmの園芸センターなど視察

2月 2日　ブエノスアイレス発　空路　ポルトアレグレへ

2月 3日　南伯日系コロニア援護協会でポルトアレグレ　日語学校の日本語劇と授業参観
ＪＩＣＡ加茂富士郎ポルトアレグレ支部長のあいさつについで熊本「日本語の国際化について」講演（レストラン「さかえ」で）

2月 4日　新村徳也総領事表敬
イボチ入植地視察　日語事情聴取（13－2ページ）
ドイツ人入植地視察
鈴木領事宅で佐藤副領事，ＪＩＣＡ 西村康男氏をまじえ情報交換

2月 5日　10時30分 ポルトアレグレ発　サンパウロへ
正午　サンパウロ着
藪　忠綱総領事表敬
日伯文化連盟の日語教師養成研修会の反省会に特別参加（「すしやす」で）

2月 6日　アルモニア学生寮訪問　小笠原貞二寮長と意見交換
ＡＢＣ文化普及会総会出席
学習館（岡崎　寛先生）見学

2月 7日　サンパウロ大学内　日本文化研究所視察
玉井乾介所長から説明きく（18ページ）

2月 8日　松柏学園授業参観　川村万里子園長と会談（19ページ）
サンパウロ人文科学研究所　斉藤広志理事訪問（20ページ）
日伯文化連盟幹部と懇談（21ページ）

2月 9日　11時　サウパウロ発　空路　リオ・デ・ジャネイロへ
正午　リオ・デ・ジャネイロ着

2月10日　リオ日系協会会議室での汎リオ文化体育連盟日語普及会　日語学校教師合同研修会で熊本「講演」

2月11日　谷田正躬総領事表敬

JAMIC百瀬昭三支部長，高橋辰夫業務課長と情報交換（「赤坂」で）

2月12日　11：05　リオ発　12：50　サルバドル着

野和田光一レシフェ支部長の出迎えをうける。

2月13日　クビチェック移住地で熊本「講演」

2月14日　野和田支部長とともにサルバドル発レシフェへ

2月15日　高松源次郎総領事表敬のあとレシフェ発　ベレンへ

16：00　ベレン着

JAMIC仁科雅夫ベレン支部長　松田潤治郎業務課長

池田厚氏とともに支部長宅で夕食　種々情報を得る

2月16日　汎アマゾニア日伯協会講での「汎アマゾニア日語教育研究会」で熊本「講演」

2月17日　カスタニャール，サンタイサベル，コケイロ各日語学校視察

2月18日　7：15　ベレン空港発　マナウスへ

8：45　マナウス着（ベレンとの時差1時間）

総領事館へ島崎領事表敬（大森淳昭総領事は帰国中）

西部アマゾニア日伯協会で熊本「講演」

島崎領事，山崎館員，加藤信三先生（補習校），津浦JAMIC支所長と情報交換

2月19日　マナウス発　メキシコへ

20：00　メキシコ・シティー着

2月20日　日墨学院を訪問，同学院　海老沢潔日本文化コース　校長と会談

2月21日　日墨文化学院，日墨会館など視察

2月22日　7：35　メキシコ・シティ空港発　ロサンゼルス経由　東京へ

2月23日　18：00　東京帰着

日本語教育研究に好意的な

パラグアイ

移住者たちは

日本的日本語教育に愛着の傾向

（1月27日）　旧知のパラグァイ国アセベド外務次官を表敬のさい，つぎのような私見を表明，同次官はこれに賛意を表明した。

パラゲアイ国でも，しかるべき機関で将来日本語研究が行われることを願っている。とくに大学や師範学校で日本語コースが開設されれば，すばらしいことと思う。またラジオ・テレビの電波メディアを通じて日本への理解と交流がいちだんと盛んになることを期待している。

昨年11月来日のさい面識を得た文部省のDirector general de Educación, Dr.Fabio Rivasを表敬（チリ大使に任命された由で喜びのことばをのぶ）

「貴殿の考えよく了解している」とのことばがあり，担当部門責任者と会うよう紹介されたが，その時間なく残念であった。

（1月28日）　イタプア県フラム中学で開催中の第5回「全パ日語教師合同研修会」を見学する機会を得た。

指導教師の野館午郎先生は熊本との会談で「パラグアイでの日語教育は児童教育である」ことを強調していた。

また同先生は「中学生になっても自分の名前が漢字で書けない者がいる」「6年卒で4年程度」とのべておられたが，異国では止む得ぬことだろう。

また昨年2世の教育理念として「まずパラグアイ国人の教養を身につけ，その上その一部として日本的なものを追加せよ」と主張した日語教師が父兄に拒否された話を耳にした。

一方「移住者はこどもの日語教育について日語学校に依存しすぎる」との声もきかれた。

「全パ日語教師合同研修会」で全パラグアイ日語教育研究協議会の大郷国太郎会長からマドリードの日本協会で発行したスペイン語による日本文字と漢字の説明書「現代日本文化の理解の道である日本文字」をパラグアイへ送付してほしいという強い要望があった。（この本は熊本が南米へ持参していたものが，それを見てこのような要望がでた）この本はマドリード国立語学校でのフェデリコ・ランサコ元上智大助教授の講演をまとめたもの。このことからマドリード国立語学校日本語科と南米の日語校との連携が考えられる。

恵まれた

環境にある

ＡＮＵＬＰの

日系学生たち

（1月31日）　アルゼンチンではラプラタにある事業団建設（1979年）の日系人学生のための寮ANULP（Asociación Nipona Universitaria La Plata）を視察した。

ここには17歳から23歳の37人（うち男23人）の日系人学生が恵まれた環境施設のなかで明るくのびのびと生活，勉学にいそしんでいた。そのうち10人がカタコトの日本語が話せ，3，4人は読めるということであった。全然日本語がわからない者も4，5人いるという。それぞれの専門科目に忙しいというのが実情だろう。

「ANULPは単にラプラタ日系学生協会の略字を意味するだけではありません。それは新しく若い日系学生協会の団結，愛，努力そして絶えまない闘いを意味しています。

この団体の起源は1970年にさかのぼります。その当時，ラプラタ市においては大学食堂が運営されていて多数の大学生たちが昼食に集まったものでした。そこで日系学生同志の視線があっても，はたしてあいさつをかわすべきか，どうかの判断に戸惑う場合が，多かったのです。たまには内気あるいは恥しさから対話に至らなかった場合もあったのです。この好ましくない状況を前に一つの小グループが生まれたのですが，これがANULPのはじまりなのです」とANULPの沿革を日本語でこのように日系学生たちはのべている。

ブ ラ ジ ル

ポルトアレグレ

日語学校を

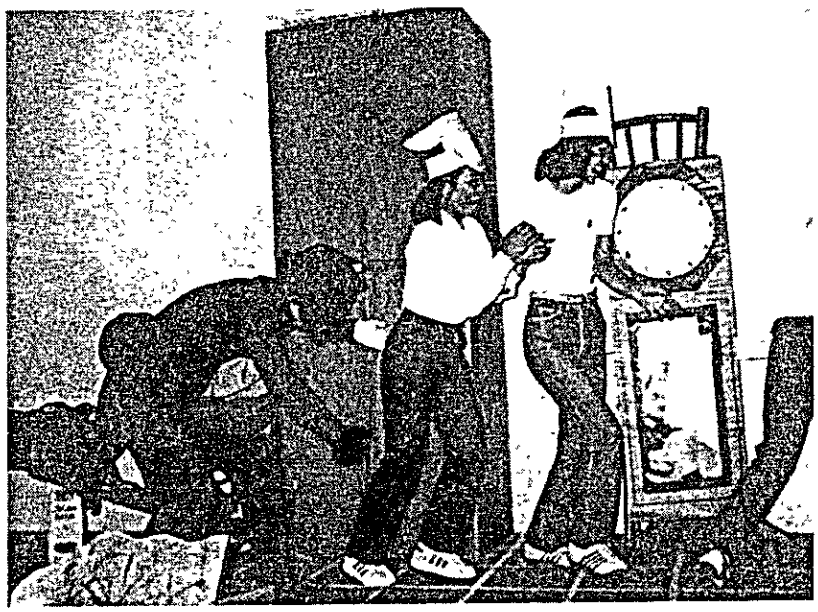
日本の義務教育の学校のように

考えてもらえまいか

と切願する

教師の声

〔写真〕
ポルトアルグレ日語教室
の生徒の演じる
「オオカミと7匹の小ヤギ」
（2月3日）



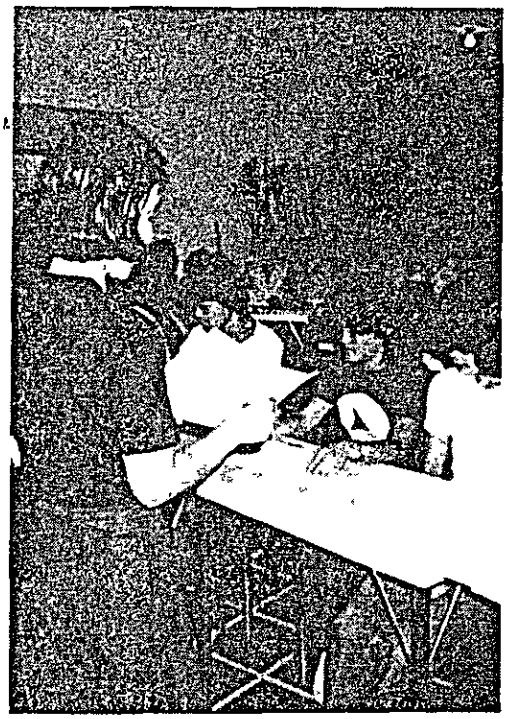
事業団ポルトアレグレ支部管内には日語校が計8校（生徒296名）があるが，ポルトアレグレ日語教室（小学生徒68名）の児玉芳子先生は南伯日系コロニア援護協会会議室で同教室生徒の日本語による劇「オオカミと7匹の小山羊」を披露，日ごろの日語教育の成果をおみせくださった（2月3日）が，要望事項としてつぎのようにのべておられる。

「私どものように地域社会の日系人のこどもを集めて日語教育をやっている教室の生徒には日本における義務教育の学校と同じように考えていただけないものでしょうか。同じ日本人の両親をもつこどもたちが，父母が移民できたので生地がブラジルであったという違いのために父母の国の国語を習いたいと思っても法外なお金がかかったり，教科書や教材が入手できなかったりというのは可哀想です。

いま幼い手にエンピツを握って一生懸命日本語を勉強しているこのこどもたちこそ，次代の日本とブラジルとを結ぶ力強い絆となるのですから……」

また毎月生徒の作文を集めた"ラーモス日語新聞"を出しているラーモス日語学校（生徒62名）の森徳子先生は「海外子女に対して実施されている通信教育の資料を手に入れたい」とのべている。

日語問題はコロニアの経済的自立基盤と大いに関係があり，経済的基盤の弱いところほど日本的教育を要求し，当局への依存度が強い傾向があるように思われる。



ポルトアレグレ日語教室
児玉芳子先生の
モデル授業

イボチ移住地を視察したが（２月４日），そこでの日語学校（生徒40名）はンスターが毎週教えに来る。しかし，生徒がしたいに授業に興味を失ない来なくなっていた。ンスターの方では「たとえ生徒が１人になっても来ます」といっているが，父兄の方ではどうしたものかと苦慮していた。

ブドー巨峯を栽培している新潟県出身の鈴木夫妻には６年生の長男（13）と３年生の長女(9)がいるが，「日本から来る手紙が読め返事が日本語で書けるぐらいにしたい」といっている。

左からＪＡＭＩＣ西村氏と鈴木夫妻　　イボチで

２月４日

サンパウロ

南米における

日語教育の

一大拠点

松柏学園の授業　　左の先生は三世

武田幸代エリザさん（21）↓

エリザさんは

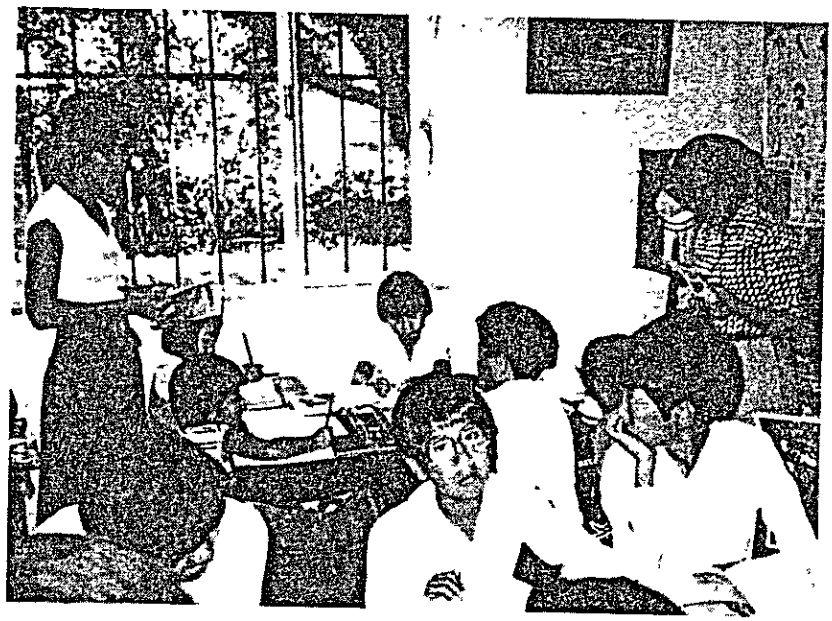
松柏学園の卒業生

1981年12月サンパウロ

州立サンパウロ大学

東洋学部日本語科

卒業



サンパウロには戦前から存在する伯国日語学校連合会（日学連）と戦後生まれ理事の3割がブラジル人という日伯文化連盟（日文連）があり，JAMICサンパウロ支部管内の日語校は400にも及ぶ（堀口進一業務課長）。

毎月日本の芸能人が訪れ，人気を博す。サンパウロの一部フェイリア（市）ではすべて日本語でOKで「なん枚におろす？」といった掛声もきかれる。日系人75万の力と数は圧倒的である。

さきごろ日学連による8日間にわたる第24回全伯日語教職員講習会もサンパウロでひらかれ，全ブラジルから170人（女性6割）が集まったという。一方，日本語を使わない2・3・4世も多く，親の努力やバック・アップがなければ子の日本語はしだいに消滅するという傾向もある。

サンパウロ到着の2月5日よる3年前から実施しているという日文連の日語教師養成研修会の反省会に特別参加させてもらった。この席上つぎの諸点が強調されていた。

○教師の待遇改善　少なくとも現在の給与の25倍ぐらいにせねば……

○はげみとして日本での研修をもっと実現してほしい。

○教師の実力の格差の問題

出席者8人のうち2世の女性教師2人が目をひいた。

アルモニア学生寮

サスパウロ州サンベルナルド・ド・カンポ市にある主に日系学生の世話をみているアルモニア学生寮（寮長　小笠原勇二氏）を訪問（2月6日），幾人かの三世と面談する機会を得た。

メランドポリスの川本美津江さん（17）はおじいさん（70）とおばあさん（65）が健在，祖父母とは日本語で話すそうだが，自分の名前を漢字で書くことはにがて。同寮の日本語教室で日本語の勉強をつづけている。

アラサツーバの中島功君（27）は大学5年（紡績技術専攻）は14歳から18歳まで日本語を勉強，カタカナ，ひらがなが楽に読める。しかし日本へはあまり興味がないらしく「日本へ留学したいか」という質問に首を横にふり「留学するならスペインかイタリアか英国」という。功君の父親は仕立屋さん，九州出身のおばあさん二人は70歳と72歳で健在。祖母とは古い日本についての会話で日本への興味がなくなったのではないかと思われる。

アルモニア学生寮では，こどもコース，成人コースなど各種各級の日本語クラスをつくり，日本語の普及に貢献しているが，小笠原寮長の話によると日本留学を目標に日本語を勉強する

者が多い。日系人は地方でこどものころ日本語をやった者が多い。大学で日本語の重要性をきいて，また勉強をはじめるが，落伍する者が少なくない。小笠原寮長は日語学習の進度の目安になる級位制度の確立に努力されている。7級からはじまりしだいに1級にまで進級するテスト制度の創設に苦労されている。小笠原寮長自身，20年 日本の土を踏んでおらず，日本での研修を強く望んでおられる。

ABC文化普及会

総会に出席の機会を得（2月6日午後），各地区日語校の諸先生が日語教育のみならず合同写生大会，臨海学校などを通じて2・3世の人間形成にも少なからず意を用いている姿に接した。（48ページに関連）

学　習　館（岡崎寛・やす子ご夫妻運営の日語校）－6日より訪問－

幼児科（130人）から高校，大学，成人クラブまで幅広く日語教育を実施，運営も軌道にのり，校舎を増築中，岡崎ご夫妻の人柄に負うところが大きいとの印象をうけた。学習館は生徒のくつろき，いこいの場ともなっているという。

サンパウロ大学構内　日本文化研究所訪問（2月7日）

玉井乾介先生と会談

同大文学部日本語科には142名在籍（1年68名，2年31名，3年21名，4年22名）その8割が女性とのことであった。ほとんどが日系人で占められ，日系でないブラジル人は5，6人とのこと。

玉井先生談「2，3世の日本語は1910年の日本語を基盤に農村の各方言あるいは沖縄の首里語プラスブラジル語，かえって白紙の方が教えやすい。日系でないブラジル人にも日本語を勉強してもらいたい。日語教師は〝日本精神〟までも教える」幼少からの日語教育は大学では期待されるほど役立っていない。

モデル日語校「松柏学園」視察，川村万里子園長と会談（2月8日）

生徒（9学級計115名1982年2月現在しだいに増加の傾向）のほとんどが3世で，家庭ではポルトガル語を使用させ，へたな日本語は避けさせるという。全人教育を行っており，道徳

は世界共通，正しい行動を考えて行え人の身になって考えよ，もともとみんないい子だーの信念をモットーに立脚，教育している。

生徒のしつけは誠によく行き届いており来訪者には「お早ようございます」と頭を下げ礼儀正しくおじぎをする。いまの日本ではもう見られない美風がみられる。昔の日本がブラジルに残っている。いまの日本はいまや東洋でも西洋でもないの感を強くする。

ある生徒が一冊の本を学び終えるクラスいっしょにケーキを切り祝うという〝褒賞制度〟も考案されていた。

2人の生徒が一冊の本を修了したのでみんなでケーキを切ってお祝い。

サンパウロ人文科学研究所に斉藤広志サンパウロ大学教授を訪問。同教授の意見。

「ブラジルの学校は智育だけ。徳目は教会と家庭で，体育はクラブ組織でやっている。日語教育に日本的なものを含むべきか，これは理論と実践をふくめた大問題だ。

日文連では外国語としての日本語にふみ出した。日本語を第一外国語とするブラジル公認の学校をつくることはいいと思う。ドイツ，フランス，イタリア，ユダヤ系の公認校はすでにあり，歴史もある」（8日）

斉藤広志教授

研究所で

日伯文化連盟では来年3月から第1外国語を日本語とするブラジル公認校ギレルメ・デ・アルメイダ学院(guilherme de almeida)を幼稚部から発足させ，やがて理想の〝日伯学院〟を実現するという。

日伯文化連盟幹部との懇談会（JAMIC 会議室）で提議された諸事項（8日）

- 日本語のできるブラジル人生徒に対していかに興味をもたせつづけるか，これがむずかしい。
- 優秀な日本語教師に来てもらいたい。
- 日本から輸入の国定教科書が1冊5ドルで娯楽，婦人雑誌などとならんで売られている。おかしな話だ。14倍の値段。
- 日本語を勉強したこどもを日本へ招いてほしい。日本語勉強のいい励みになる。
- 日本語講座を英，独，仏，伊各国語とならんでラジオ・サンパウロなどから流すことを考えている。日本の音楽テープなどほしい。

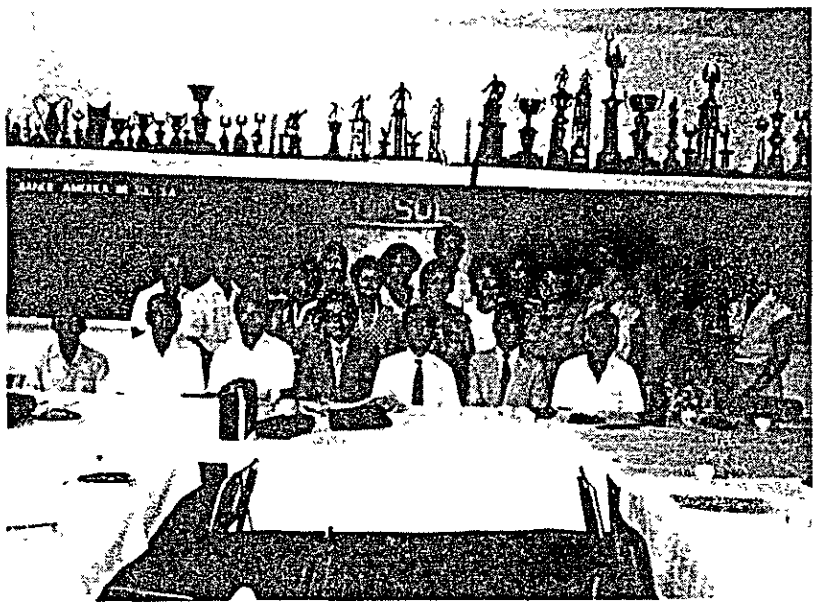
完全都会型の

リオデシャネイロ

汎リオ文化体育連盟日本語普及会の合同研修会はリオ日系協会で開催。熊本講演1時間のあと日本人学校の国語担任の村松教諭の国語指導の問題点について講義があった。（2月10日）

汎リオ文化体育連盟の植本智理事長はじめ日語学校関係者約30名が参加，このなかには2世教師2人，3世教師1人（いずれも女性）がいた。日語の程度がまた低いという声もきかれたが，完全な都会型で日語教師の意識はかなり啓発されている感じ。

汎リオ文化体育連盟にはリオ・日系校（生徒106名）など12校449人の生徒がいる。



年１回の

クビチェック移住地での

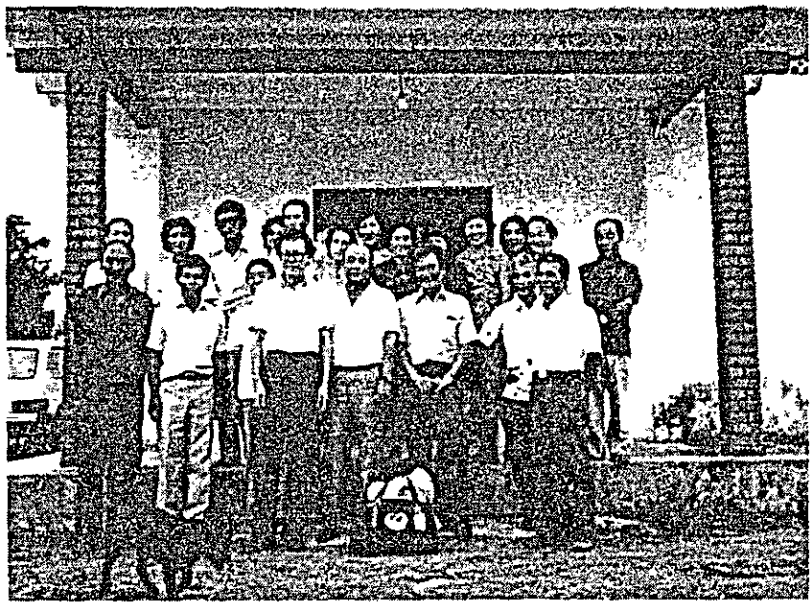
合同研修を待望する

バイア州の日語教師たち

ほとばしる

日語教育への情熱

と同胞意識



遠く離れているタベロア，イソベラ，ウナの各移住地からも丸々1日がかりで日語教師がクビチェク移住地に参集，地元日伯文化協会会長西谷従及亶会長ら15人が2日間にわたる第5回合同研修を意欲的にこなした，（13－14日）

熊本「講演」にも興味しんしんで耳を傾けてくれた。

研修会で日語教師が強調した諸点

- なんといっても家庭内の日本語が大切。これを大事にせよ
- 日本語を忘れさせない躾けが必要。たとえば日本語の読書を習慣づける。日記をつけさせる。
- 楽しみながら勉強させる。たとえば海岸での遊びながらの日語教室には出席率100％だった。
- 暗誦するまで何回も読ませる。
- 日本と文通させる。Penpalをもたせる，しかし返事が来なくてがっかりしたケースもあるので日本側は答えてやってほしい。

参加日語教師のなかには在伯50年の梶家房子さん，13歳のとき渡伯した一世や2世の女性が3人もいた。

日語教師同士，互いに日頃遠く離れ，顔を合わせることのむずかしい境遇，年1回の研修には，同じ船で移住した同胞もおり久しぶりの再会の場，旧交を温める貴重な場ともなっている。

クビチェック移住地，イタビシリカ小学校の授業視察（14日午前）

たまたま日曜日のあさ雨。雨の泥道の中ずぶぬれになって日語学校にやってくるこどもたちの姿に胸を打たれた，一人の少女のぬれた頭と教科書にハエがいっぱいたかり，少女が追っても追っても離れず，そのまま授業をつづけていた姿も忘れない。

西山喜多雄先生

イタビシリカ日語校校長

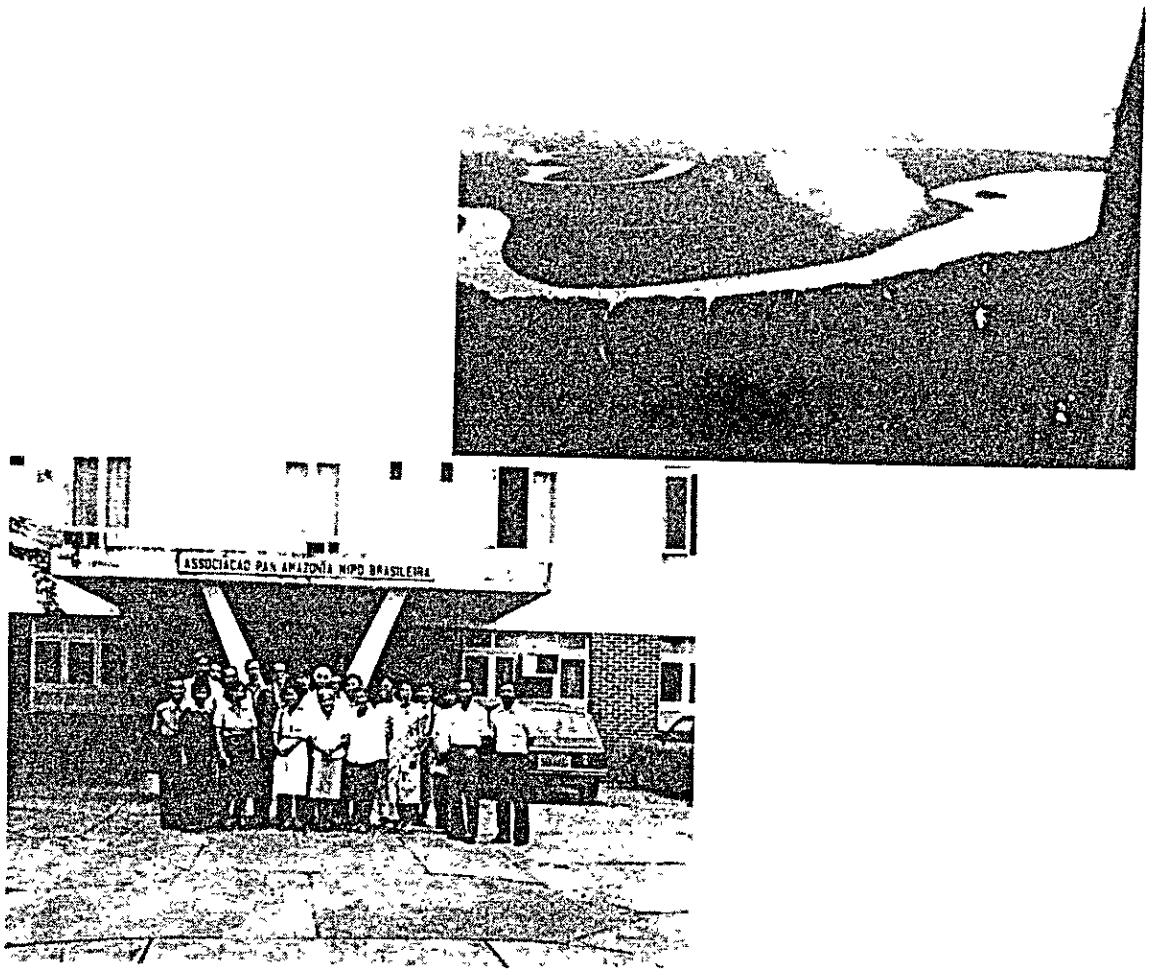
アマゾン地域

散在する移住者

いまだ安定せず

その子弟の日語教育に

教師は犠牲的奉仕



ベレンの汎アマゾニア日伯協会の講堂でのアマゾン地域日語教育研究会（国分伊次会長）の合同研修会。トメアスー日本語学校ら9校18人の日語教師が参加。まず熊本講演のあと各日語校における現状と問題点の報告があった。（2月16日）

各校の現状あるいは問題点

- ベレン市内にあるアドベンチスタ日本語学校（教師4名，生徒127名）では日系大学生が多い。パラ連邦大学では日本語講座があり，単位になる。主に日系人が勉強しているという。
- トメアスーに1980年度から高校が設立されたが，まだ大半はベレンの高校へ進学するので，最高小学4，5年までの勉強で日本語の勉強が中断する。一部はベレンのアドベンチスタ日本語学校で勉強をつづけるが，どうしてもブラジルの学校が先になってしまう。
- 低学年用の教科書が不足する。
- 生徒は低学年が多いが，学校が遠いため，来れなくなるケースが多い（第2トメアスー，サンタイサベル）
- 授業料より交通費の方がかかる。
- 最悪条件下にあるが，"日本語を楽しく…"をモットーに遊びを入れながらやっている。宿題を出し，こどもと母が一体となって勉強するようすすめている（イガラッペアスー日本語学校　佐々木邦子先生）
- 日曜日は家族と楽しむよう土曜日を日語教室の日としている。家庭で日本語を使おう運動を展開している（カスタニャール　兵藤伸子先生）
- 広い会館ホールをつい立てで間仕切りして授業をしている。しかし反響して授業困難。校舎，教室をもちたい（サンタイサベル）
- 日本語会話がとりかわされず2年経っても3年経っても進歩がない。結局"とりあえず間に合う日本語"ということになる（国分伊次会長）
- 日系人経済は70％定着していない。このため，こどもにつくせない（同）
- こどもに日本語を習わせる親の目標がぼく然としている（同）
- 少数精鋭主義の教育をやろうと思ったら大勢入学，それが不可能になった。（カスタニャール　兵藤先生）
- 親の熱心な子はよくできる。ブラジル人の日本への関心はますます高まり，混血児の入学も多い。母親がブラジル人の場合家庭で日本語は教えられない（コケイロ　丸岡千代子先生）

○日伯親善のため〝切り捨て〟できず，おちこぼれも拾い，日本語をおぼえてもらうようにしている（トメアスー）

○よく話せるが，それを生かす機会がない。読み書きまで行かない（カスタニャール）

○ビデオ漫画をつくってほしい（同）

○こどもに日本を見せる機会を与えて欲しい（同）

カスタニャール，サンタイサベル，コケイロの各日語学校を視察

カスターニャール，サンタイサベルでは父兄とも懇談した。（17日）

カスタニャール，サンタイサベルとも会館ホールで授業，教室がない。コケイロは広い庭園にも恵まれ，教室を拡充していた。

マナウスの西部アマゾニア日伯協会（寺野義勝会長）

ホールで熊本講演のあと島崎領事をまじえマナオス日語校（毎土曜101名）とベラビスタ日語校（毎日曜39人）の教師　小茄子川力雄氏らの懇談（18日）

マナウスを中心に日系人2600人がいるというが，奥地1000kmにも入植者がいて，日語学校をはじめる気運があるという。

マナウスでは協会が週2回（夜7時～8時30分）ブラジル人対象に国際交流基金の協力で日本語講座をひらいているが，脱落者が多い，どうしたものか―という質問があった。語学だけでなく日本人ならびに日本に関する興味たる話題を提供しつつ講義をすすめる工夫が必要だと助言した。日本での教師の研修をぜひお願いしたいとの声があった。

メ キ シ コ

日墨学院に

日語教育の

理想的姿を

みる

日墨学院を訪問，海老沢潔同学院日本文化コース校長と会談（２月20日）

Liceo mexicano Japonés.A.C.

メキシコ国公認の幼稚部から高校まである日墨学院（1977年発足）はメキシコ人⅓，日系人⅓，日本人⅓，計1186名（うち日本人340名）の生徒を擁し，メキシコ人と日系人のための「メキシコ・コース」ならびに外国語として必修の日本語と日本文化学習のための「日本文化コース」それに日本人のための「日本コース」をもつ。

海老沢日本文化コース校長は「試作錯誤の連続」といわれているが，日語教育の理想的姿を，まのあたりにみた。これはメキシコ政府の理解と日本政府，日本企業，日系コロニアの協力の賜ものであろう。近く発足しようとしているサンパウロのギレルメ・デ・アルメイダ学院もこれに似た姿を実現することになろう。

日墨学院を手はじめに，近い将来，日本人移住者の多い南米各国に相手国公認のモデル校があいついで創設され，日本語が必修第一外国語として現地国人をまじえ学習されることが理想であろう。

日本語学習意欲の芽をつむな

日墨学院の海老沢日本文化コース校長の話によると，このほど日本のある国立機関は国際交流基金から日本語講師を派遣している日本語教育機関の生徒に日本語の検定テストをいっせいに行い，日墨学院に対しても実施した。この日本側の一方的な検定テストはせっかく芽が出はじめている現地の日本語学習意欲に微妙な影響を与え，好ましからぬ結果を生むことにもなりかねない。検定は相手側の要望に基づいてやるべきで，日本側から乗り出してやることは日本語の〝押売り〟的印象を与え，逆効果となる。慎重を期すべきだという意見があった。

日墨文化学院（Instituto Cultural Mexicano Japonés）も視察（２月21日）

ここでは年間のべ1,000人が日本語を学習しており，うち３世（15歳～20歳）が15％という。３世はメキシコ人と全く同じだという。

日墨会館も見学（２月21日）

レクリエーションの場として日系人とくに３世が目立ち，彼らのいこいの場，メキシコ人との交流の場となっていた。

くやまれる

ＪＡＭＩＣ

ＪＥＭＩＳ

の撤退

南伯日系コロニア援護協会

ＪＡＭＩＣ，ＪＥＭＩＳ撤退後は人材が少なくなる。サンパウロぐらいコロニーが，発展すれば心配はないが，ポルトアレグレでは経済的に悠々自適の移住者は少ない。援護協会の仕事はおちこぼれの救済事業，生活互助組織となるが，日本国の面積のところに1,000家族が散在するためこの事務経費もバカにならない。十分な事業費もなく運営はむずかしくなるのではないか。援護協会に事務の運営，予算などを教え込むだけでも大変なことだ。協会職員の訓練と助成を計画的にやる必要がある。このまま手を引くと壊滅状態になる恐れがある。

サンパウロ日伯文化連盟

ルイス花田正洋事務局長の若さ，日伯文化交流，日本語普及の積極的意欲には頭がさがるものがあった。"繁盛"する同連盟の日本語教室，教材の開発，その他の活動に目を見張るものがあった。連盟の背後には有力メンバーのバックアップもあり，その基礎はゆるぎないように思われた。

レシフェ文化協会

訪問の時間がなかったが，学生会館のなかに事務所をもつとのことであった。ＪＡＭＩＣ，ＪＥＭＩＳの事務所では縮少や"看板"のぬりかえやらで大変なようすがうかがえた。協会の広範囲の守備，容易ならざるものがある。

汎アマゾニア日伯協会

安井事務局長のほか２人の職員がおり，仕事に追われていた。事務費も十分でなく累締してやっているようすがうかがわれた。

西部アマゾニア日伯援護協会

元満鉄にいたという老夫妻がおられ，事務処理もとどこおりなく行われているもよう。日系企業の進出もあり，この地域にはなにか力強さが感じられた。

日語教育に

電波を

ZP V 99 1 MEGAHERTZ
RADIO PARANA
RADIOEMISORA DE FREQUENCIA MODULADA EN ESTEREO
INAUGURADA POR EL EXCMO SR. PRESIDENTE DE LA REPUBLICA
GRAL DE EJERCITO
DON ALFREDO STROESSNER

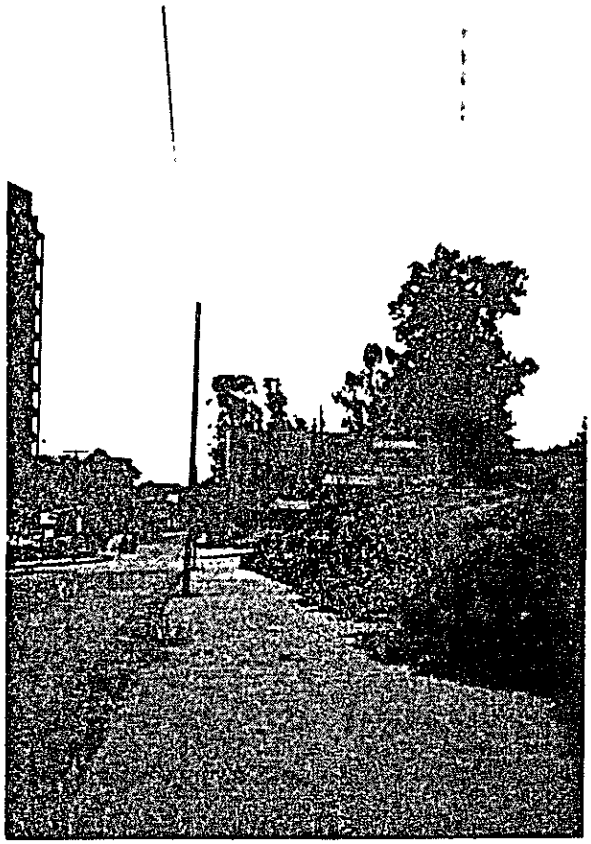
（電波にかんする情報１）

今回の派遣地ではないが，ボリビア，サンタクルスのサレジオ会の学校 Escucla Salesiana Muyurinc では最近放送局を設備，近くオキナワ，サイファン両移住地をカバーできる電波を出す出す。同校ではこれを日語教育に活用してもよいといっている。

（同会　倉橋神父からの情報）

パラグアイにも同会の大きな農業学校があり，役立つことがあるかもしれないという。

倉橋神父は現在サンタクルスにおられＪＩＣＡ上園サンファン所長と連携，移住者のため活躍中。



エンカルナシオンの
Radio Parana　FM
放送局

（電波にかんする情報２）

Asociación Paraguayo Japonesa（会長：Marcial Samaniego氏）によって，あさ６時半から８時までスペイン語をまじえた日本語放送を実施していたアスンシオンの「ラジオカリタス」ＺＰ１１短波５kmは予算不足のため現在日本語放送を行っていない。ラジオカリタス（José

Angel l rcelay局長）は1日3時間の"日本語放送"に対して月18万グアラニ（約25万円）の電波料を要求している。

アスンシオンでの邦学紙関係者との会談でエンカルナシオンのZP5局の活用やイグアスに放送局を創設することの必要性が力説された。

（電波にかんする情報3）

マナウス空港で知り合ったブラジル旅行から帰国途上の日本人学生，赤星浩一君（21）＝京都産業大法科3年＝の話によると，10歳のとき移住した同君の叔父，河村淳氏（38）＝ベレン在住宣伝広告PR業，住所 Trav Angustura 2623 Belém Cep 66000 Tel 自宅 226-3176＝は昨年7月から3か月間あさ8時から8時30分まで"Bon Dia Colonia"という番組をベレンのRadio Guajaraから放送，移住地のニュースや日文連のニュースそれに総領事館にある日本の新聞からのニュースを流した。

しかし，ブラジル当局の日本語放送"禁止令"にふれたらしく中絶を余儀なくされ，移住者から残念がられたという。

同君は10か月在伯，この間河村氏の仕事を手伝いアナウンサーもやったが，日本の新しいニュースがなく苦労したともらしている。

（電波にかんする情報4）

1) エンカルナシオンで有限会社VIDEO COLORを経営している中塚彰氏はVIDEOの輸入をしているが，教育用VIDEOが入手できないのをなげいていた。
2) サンパウロの学習館の岡崎寛氏は「日本のVIDEOは来るが古い，その上教育的なものが少ない。NHKの学校放送"お話でてこい"などほしい。日本語講座放送してほしい」といっていた。
3) サンパウロではNTVの木曜日までのニュースを金曜日のVarigで送り（土曜日あさサンパウロ着）
日曜日あさ週刊トピックとして2時間ぐらい放映している，また11チャンネルでは土曜日よる7時から10時半までNHKの週間ニュースをやっている。日本からのVTRは引っぱりダコで商売になっている（半年4万クルゼーロ）ラジオ局も3局日本の音楽を流している。

む　す　び

1. 今回の視察で数多くの日語教師に接する機会を得たが，日語教師の祖国愛と日語教育の熱意には敬服に価いするものがあった。悪条件のもとで挺身しているこれら日語教師には今後ともできるだけの支援とはげましをつづけ，日本での研修の機会を与えようとはかる。

2. 日語教育の振興のため，日本サイドに「対海外日系人日語対策委員会」を設置する。具体的には同委員会によってつぎの事項の促進をはかる。

   1) 日本サイドと現地サイドの有機的タイアップとシステム化

   2) 現地日語校からの要望事項の対策協議

   3) そのＰＲ

3 移住地初の試みとして，ボリビア・サンタクルスのサレジオ会の協力を得て，同会放送局から「スペイン語による日本語講座」をオキナワ，サンファン両移住地向け試みる。

（29ページ関連）

4 アスシオンのＺＰ11局の日本語放送の復活をはかる。これは対海外日系人日語対策委でも協議する。（29ページ関連）

5 日本がすすめているパラグアイにおける国営教育テレビ網設置15か年計画（1983〜1997）にあわせて同国での「スペイン語による日本語普及講座」のラジオ国際放送実現をはかる。

6 Emigration から Imigration 事業へ南米からの人的交流のパイプを太くせよ。より多くの日語教師に現在の日本を見せよ。年間20人ぐらいでは少なすぎる。（ＯＤＡのワクに切り換えられないか，教師のみならず生徒も休みを利用して日本で勉強させよ。年間3000人ぐらいのワクをつくれないか）

7 日語教育はやがて外国語としての日本語教育に変わらざるを得ない。この意味から二世あるいは三世日語教師の育成その実力養成に力を入れる必要がある。

8 日本のラジオ・テレビ局と現地各局との連携促進をはかる。

9 日本語の国際化についての世論喚起をPRの促進をいちだんとはかる。

10 日本語の国際化とは相手国制度のもとあるいは公認のもと外国語としての日本語クラスを開設できるよう相手国に働きかけ，その実現に努力する。

11. このため日本側は日本移住者の多いパラグアイ，ボリビア，アルゼンチンなどの大学その他の機関へ日本語教育専門家を派遣することを考慮する（7.10との関連）

12 パラグアイあるいはボリビアに「日本語講座」の拠点を設ける（3. 4. 5. 6との関連）

日語教育

<table>
<tr><th colspan="2">諸　条　件</th><th colspan="2">新施策</th></tr>
<tr><td rowspan="2">幼児
児童</td><td rowspan="5">親の責任
自発的意志</td><td>○両親が日本人なら，家庭で日本語を使うことを義務づける
○親が2世あるいは母親が現地国人の場合，学校にたよらざるを得ない
○学校が遠く交通費がかかりすぎる
○先生がみつからない
○教室がない
○カネがない</td><td rowspan="5">電波の活用により　悪条件を克服する</td><td rowspan="5">対海外日系人日語対策委員会の設置</td></tr>
<tr><td>中学</td><td>○日本語学習のインセンティブがない</td></tr>
<tr><td>高校</td><td>○大学受験で日本語どころでない</td></tr>
<tr><td>大学</td><td>○各地大学に単位としてとれる日本語講座の開設に努力する</td></tr>
</table>